

中田信正先生を称えて

経営学部長 谷 口 照 三

中田信正先生は、42年という永き年月の間、言葉では十分に意を尽くすことが出来ないほど、本学の発展のために献身された。その先生が、2002年3月をもって定年退職なされる。「定め」の故とはいえ、誠に残念なことである。

先生は、1959年12月に立命館大学大学院経済学研究科修士課程を修了され、桃山学院大学には翌年、1960年2月、経済学部助手として赴任された。1962年には簿記担当の専任講師に、1965年には助教授として簿記、税務会計、演習をご担当になられ、そして1972年に教授になられた。1973年4月経営学部が創設されると同時に経営学部に移籍され、さらに税法をも担当された。また、1993年4月に大学院経営学研究科修士課程が創設されると税務会計論研究と演習を、さらに1999年4月博士課程創設により環太平洋圏経営特殊研究と特殊演習を担当されるようになった。この様に、先生は、今日まで永きに、また多様な面に亘って、しかも通常よりも多数の学部学生、大学院生のご薫陶に当たられた。

さらに先生が、ご専門の税効果会計論、税務会計論、財務会計・税法関係論のご研究では学界の第一人者として深く研鑽を積まれ、本学の教育・研究の両面に亘って、また学界において多大の貢献を果たされたことは、周知の事実である。先生は、1954年に税理士資格を、1956年には公認会計士資格を若くして得られている。実践的マインドと理論的マインドの双方を兼ね備えられた先生は、学界のみならず、本学及び経営学部にとっても極めて貴重な、また大きな存在であり続けられた。定年を迎えられようとされている現在においてもなお持ち続けられている「生命の深い泉から湧き出る新鮮な輝き」

は、先生のこの特質に由来するものと考えられる。

中田信正先生は、教育・研究のみならず、学内行政面においても、本学のため多方面に亘り尽力下された。ご在職中、先生は、1976年4月より1978年7月まで入試委員長、1980年4月より1981年3月まで学生国際交流委員長、1983年4月より1986年3月まで図書館長、1986年4月より1988年3月まで経営学部長、1988年4月より1990年3月まで国際センター長、1992年4月より1997年3月までASC運営委員長の各要職を歴任された。特筆すべき事は、さらに、1993年4月より1995年3月まで、また1998年4月より2000年3月まで、2度の大学院経営学研究科長を務められた。第1回目は、初代の研究科長として、その重責を果たされたことである。第2回目は、博士課程の立ち上げのためにあえて先生にご無理をお願いした結果である。経営学研究科にあっては、既に昨年度課程博士の第1号を輩出し、さらに今年度博士課程の完成年度を迎えた。研究科は、今、さらなる発展へのプラットフォームに立っている、ということが出来る。ここに至り、中田先生の偉大な貢献を我々は忘れることは出来ない。

以上のような多大な御功績を称え、先般、経営学部教授会の推薦のもとに大学評議会は、中田先生に桃山学院大学名誉教授の称号を贈ることを決定した。

中田信正先生、本当に永い間ご苦勞様でした。心より深く感謝申し上げます。また、併せて、今後とも折に触れて我々後進にご高見とご指導を賜りますようお願い申し上げます。先生には、今後も一層のご活躍の場が与えられると思いますが、末永くご健勝にてお過ごしになられることを祈念して、送別の言葉とさせていただきます。